

平成 29 年 8 月 28 日現在

機関番号：32680

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25463366

研究課題名(和文)在宅ケアに従事する看護職の「生活」の概念の明確化

研究課題名(英文)Clarification of the idea of "life" of nurse to be engaged in home care

研究代表者

服部 真理子 (HATTORI, MARIKO)

武蔵野大学・看護学部・准教授

研究者番号：50336492

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、在宅ケアに関わる看護職が援助の際に療養者と家族が望む生活と医療をどう捉え統合し援助の方向性を決定、支援するか訪問看護ステーションと高齢者デイサービスの看護職と福祉職の面接調査から明らかにした。看護職・福祉職が捉える生活は、食事、入浴、睡眠、外出の日々の営みであり社会的交流や役割遂行も含み、基盤に本人の希望が存在する。そして、福祉職は本人の機能低下や要介護状態により失う役割、社会参加等、家族が介護により失う様々な権利の擁護の視点で、看護職は予測を含めて病気や障害、老化に伴う健康状態の変化による安全・安楽な生活への影響、健康状態の生活への影響へ医療の視点から支援していた。

研究成果の概要(英文)： This research made it clear from an interview survey to a welfare work and a nurse of senior citizen day service, a home visiting nurse how did a home visiting nurse catch and integrate the life and the medical treatment a recuperation person and the family desire in case of care, and whether a decision supported directionality of care.

They catch that it's daily work of a meal, going out, a social exchange, bathing and sleep, included in a social exchange and execution of the role and one's own request exists in a foundation. And nurses was supporting from an influential medical viewpoint influence to a safe comfortable life of a change in health and a life of health with sickness, an obstacle and aging including a prediction. Welfare work was supporting from the angle of the protection of the right that a recuperation person lose social involvements and the roles by the loss function declines and the family lose by nursing.

研究分野：地域・在宅看護学

キーワード：在宅ケア 生活 看護職 福祉職

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

## 1. 研究開始当初の背景

医療の進歩、高齢社会の到来とともに、介護保険をはじめとする制度や社会資源が充実し、人は病気や障害を持ちながらも在宅で療養生活を送ることが可能となった。

## (1) 在宅ケアにおける生活の視点の重要性

治療の場である病院では、患者を中心として治療をいかに安全安楽に遂行するかの治療を中心とした看護が展開される。

一方、在宅ケアで展開される看護は、治療を継続しつつもその人らしく生活をいかに実現していくかの生活を中心とした看護が展開される。よって、在宅における看護では、医療から生活へ看護の視点をシフトする必要がある。加えて、在宅ケアでは、療養者とともに生活を共にし、その介護に携わる家族にも看護を展開する必要がある。すなわち、病気や障害を抱えながらもその人らしく生きようとする療養者と家族に寄り添い、望む生活を支えることが在宅ケアにおける看護の重要な役割と考える。

## (2) 療養者と家族を支える多職種や社会資源の連携・協働

在宅ケアにおいて看護職のみで療養者と家族の生活を支えることはできない。医師や理学療法士、作業療法士などの医療分野、ホームヘルパー、介護福祉士などの福祉分野、保健師などの保健分野の専門職などのフォーマルな社会資源、加えて患者会や各種ボランティア等のインフォーマルな組織が療養者と家族の生活を支える。

そして、介護保険制度の導入によりデイサービスや訪問看護、訪問介護、短期入所施設等の社会資源が整備され、様々な組織や社会資源、専門職が連携・協働し、それぞれの視点を持ち役割を果たすことで、療養者と家族のその人らしい生活を支えることができる。

## (3) 多職種の連携の中での看護職の役割

さまざまな社会資源が整備される中で、看護職は訪問看護ステーションをはじめ、デイサービスや訪問入浴、施設等で従事している。特に居宅サービスである訪問看護やデイサービスに従事する看護職は、療養者と家族の療養生活の一部を支える点で、「生活」の視点を持ち、寄り添い援助することが重要である。「生活」の視点を大切にすることは福祉を含めた他の領域の活動でも共通する。一方、生活を重視しながらも、看護師は健康問題や疾病・障害を踏まえて対象者を把握する、「生活」に寄り添うことができる「医療」の視点を持つ専門職であり、在宅ケアにおける医療の専門家の役割は大きい。しかし、療養生活においては「生活」と「医療」が時に

対立することがある。「医療」の視点を最優先することでその人らしい生活が脅かされ、「医療」の視点をないがしろにすることは、療養者の命を脅かすことになる。在宅ケアに従事する看護職は、「生活」と「医療」の視点を持ち、時に相反する視点を統合し、援助の方向性を決定していると考えられる。

しかし、その過程については今まで明確に示されてはこなかったと考える。よって、看護職が「生活」と「医療」の視点をどのようにとらえ、その視点をどのように統合して援助の方向性を決定、療養者と家族を支援しているかを居宅サービスである訪問看護ステーションと高齢者デイサービスで勤務する看護師に面接調査を行うことで明らかにする。また、看護の比較として生活の視点で援助を行う高齢者デイサービスの生活相談員等の福祉職を対象とした「生活」の視点に関する面接調査を同時に行い比較することで、看護の特徴をより明らかにする。

## 2. 研究の目的

在宅ケアに関わる看護職が援助を行う際に「生活」と「医療」の視点をどのようにとらえ、その視点をどのように統合して援助の方向性を決定、療養者と家族を支援しているかを、居宅サービスである訪問看護ステーションと高齢者デイサービスで勤務する看護師に面接調査を行うことで明らかにする。比較として生活の視点で援助を行う高齢者デイサービスの生活相談員等福祉職を対象とした「生活」の視点に関する面接調査も訪問看護の特徴を明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究は、在宅ケアに関わる看護職が援助を行う際に「生活」と「医療」の視点をどのように捉え、その視点を統合しているかを訪問看護ステーションと高齢者デイサービスで勤務する看護師、比較対象として高齢者デイサービスの生活相談員等福祉職を対象とした面接調査によって明らかにする。

## (1) 研究対象者

訪問看護ステーションおよび高齢者デイサービスに従事する看護職、生活を援助する他職種の比較対象として高齢者デイサービスに従事する生活相談員等福祉職を対象とする。予備調査では各1名の計3名、本調査では訪問看護ステーション看護職5名、高齢者デイサービスに従事する看護職3名、生活を援助する他職種の対象として高齢者デイサービスに従事する生活相談員等福祉職3名を対象とする。

## (2) 研究方法

在宅ケアに従事する看護職及び福祉職の捉える「生活」と「医療」の視点について文献検討から半構成的質問紙を作成、予備調査を実施する。その結果から半構成的質問紙を修正、修正した半構成的質問紙により本調査を実施する。面接調査の逐語録から「生活」と「医療」の視点に関わる項目を抽出する。半構成的面接法による質的記述的研究である。

半構成的質問紙の内容について

### ・ 予備調査の調査内容

面接調査内容は、在宅ケアで看護師、生活相談員としてどのように「生活」への援助を行っているかを自由に話してもらい。加えて、利用者の生活をどのように捉えているか、病気や健康状態による利用者の生活への影響、生活への援助がスムーズにいったと感じたケース、生活への援助が難しいと感じたケースはどのようなケースであるかの内容を含んだ。また、面接調査について質問の内容の話しやすさ、話しづらい場合、どのようにお聞きしたら話しやすいかの調査内容についての感想も伺った。

### ・ 本調査の調査内容

予備調査で訪問看護師、高齢者デイサービスに勤務する生活相談員と看護師の各1名に予備調査を実施した内容から、日々の援助には日常生活の維持という視点が混在して含まれているため、対象者が「生活」を具体的に言語化することが難しいと考えられた。よって、福祉職と看護職の職種間の比較、病院（施設サービス）と在宅ケア（居宅サービス）のサービス提供の場の比較することで生活をイメージしやすくすることができると考え、質問内容を「福祉職と看護職の援助を比較した際の生活の視点での援助の違い」、看護職のみ「病院と在宅ケアにおける看護を比較した時の生活への看護の違い。」、「生活と医療を援助の中でどのように統合しているか。」に変更した。さらに、面接で確認する内容を聴きとるために、対象者の話の流れにあわせた質問を臨機応変に行った。

## (3) 倫理的配慮

予備調査については東京女子医科大学倫理審査委員会、本調査については武蔵野大学看護学部の倫理委員会の審査を受けて調査を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 予備調査

訪問看護ステーションおよび高齢者デイサービスに従事する看護職、生活を援助する他職種の比較対象として高齢者デイサービ

スに従事する生活相談員各1名の計3名を対象に面接調査を行った。対象者は全員が女性であった。

生活とは、朝起きて食事をし、外出する、他者と交流して夕方に帰って、食事をして入浴して寝るという日々の暮らし、リズムがある。本人の希望、どのようにしたいかが基本にあり、所属や社会的な役割も含まれる。そして、自立が原則である。

しかし、介護保険のサービスを利用する利用者は、病気や障害、老化により介護を必要とする方であり、生活をするために介護者を含めて他者の援助が必要となる。

介護が必要になった状況によりそれ以前の希望が果たせなくなり、現在の状況での本人の希望を見つけ出す必要がある。また、介護が必要であっても自立が基本であり、現在できるセルフケアの状況を確認し、介護や援助は必要最低限で行われる。介護を行うのは家族であり家族の希望や介護状況も療養者の生活に影響する。デイサービスの福祉職としては、機能訓練やレクレーション等を通して支援、看護職は医療的な側面から支援している。単独の専門職での支援では支えることが困難であり、施設内外を含めて連携・協働が行われている。支援を行う中で、本人や家族の希望を聞き出し、実現していくためには信頼関係が必要である。以上のことが明らかになった。

また、面接調査を行う中で、生活の視点は支援の根底にあるため、言語化しにくいことが明らかとなった。よって、半構成的質問紙の質問内容を専門職の比較や施設間の比較の内容を含め言語化しやすいものに変更した。

### (2) 本調査

本調査では訪問看護ステーション看護職1名、高齢者デイサービスに従事する看護職3名、生活を援助する他職種の比較対象として高齢者デイサービスに従事する生活相談員等福祉職2名を対象に面接調査を行った。

面接内容の逐語録より以下のことが明らかとなった。

看護職・福祉職が捉える生活とは、衣食住や朝に起き、食事をし、外出、社会との交流を持ち、夕方に帰宅、食事を済ませ、入眠するという流れであり、社会的交流や役割の遂行をも含むものである。本人の希望がその基盤にはあり、そのため自立が必要とされる。また、生活に影響する要因として健康状態、経済状態、家族等が関係しているため、一人として同じものはなく生活は多様性が存在する。

そして、福祉職、看護職が共に支援する方々は病気や障害、老化にともない介護を必要とするため、生活を一人で自立して営むこ

とができない。よって、専門職は、本人ができるセルフケアの部分を尊重し、病気や障害、老化により行うことができない部分を介護者とともに支え、その方々が、住み慣れたところで安全に健康に暮らし続けることができるように支援していた。

その支援のためには、介護が必要であっても本人がどのように生活をしたいかという自分の意志を確認する必要がある。その意思を引き出すためには、療養者と専門職の信頼関係の構築が必要であり、加えて介護をする家族にも希望があり、療養者と家族の希望を調整することも専門職の役割として求められている。

施設による支援の違いとしては、デイサービスにおいては家や施設での日々の生活の全体を把握し、施設で過ごす時間を療養者の生活の中にどう位置づけるかを検討して療養者の支援を行い、訪問看護ステーションでは療養者の生活全体を捉えたうえで生活における看護の役割を遂行することで支援を行っていた。

専門職による視点の違いとしては、福祉職は、療養者の機能低下や要介護状態により失われる役割、社会参加等の権利、家族の介護による介護負担等により失われる権利に対して権利擁護の視点で支援を行い、看護職は予測を含めて病気や障害、老化に伴う健康状態の変化の安全・安楽な生活への影響、健康状態の生活への影響の医療の視点から支援を行っていた。

加えて、生活は衣食住、基本的な生理的欲求から、役割の遂行、社会参加まで幅広い活動を含むため、単独の専門職により支えるのは難しく、それぞれの役割を踏まえた上で、連携・協働を行う必要がある。

今回、本調査では訪問看護ステーション看護職5名、高齢者デイサービスに従事する看護職3名、生活を援助する他職種と比較対象として高齢者デイサービスに従事する生活相談員等福祉職3名を対象とする予定であったが、十分な人数の確保ができなかった。よって、今後、訪問看護ステーション看護師への面接調査を追加し、分析を深め、学会発表、論文投稿を行う予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

服部真理子 (HATTORI, Mariko)  
武蔵野大学・看護学部・准教授  
研究者番号: 50336492

### (2) 研究分担者

関美雪 (SEKI, Miyuki)  
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授  
研究者番号: 40299847

小谷野康子 (KOYANO, Yasuko)  
順天堂大学・医療看護学部・准教授  
研究者番号: 50307120